

IV-49

街路形態が住民相互認識レベルに与える影響

東北大学 学生員 高井洋志

東北大学 正会員 平野勝也

東北大学 F 会員 稲村 肇

1. はじめに

具体化された空間構成は、社会的慣性力となり、人々の社会的行為の在り方、生活の仕方を規定する。したがって社会の空間構成を行う都市計画、建築においては空間が規定しうる人間の行動、社会的行為を考慮したデザインが要請され、必然でもある。

しかし「街路と人間関係」という枠組みで捉えた研究は数少ない。太田ら¹⁾は街路がコミュニティ形成に及ぼす影響を研究したが街路特性を列挙してのコミュニティ形成影響要因の実態把握にとどまっております。街路が規定しうる人間行動、現象から人間関係にどう影響するか論じてない。つまり街路という物と人間関係を直接リンクさせているだけでどうして、どのようにリンクしているか論じていないところに問題がある。

そこで本研究は、街路形態が近隣住民相互認識という人間関係に与える可能性を街路形態が規定しうる行動、現象を考えた上で実態調査を通して検証することを目的とする。そして住民相互認識という人間関係から捉えた街路形態の1つの在り方を提案し、そしてこれからの都市整備におけるコミュニティ形成にもつながりうる1つの施策を与えようという試みである。

2. 街路形態の分類

街路形態が住民相互認識という人間関係を規定する要素として、住民生活のはみ出しの度合い決定する「空間分節」、近隣住民が出会う、またよそ者の進入度合いを決定する「街路パターン」が重要であると考えられる。そこでこの2つの要素で街路形態を分類することにする。

(1) 街路と住宅の空間分節（表層）

篠原ら²⁾は大野³⁾の分類を元に生活の街路へのはみ出し度合いを考え、街路と住宅の空間分節を5段階の分類を行った。

最も生活のはみ出し度合いが大きい、1次面（主屋の路側の壁面）が街路に直接面しているタイプである直接外壁型（町屋型）。次に、塀、生け垣のような2次面が存在し、1次面と2次面が近接しているタイプ

の1、2次面近接型。最も生活のはみ出しがない、1次面と2次面が離れているタイプの1、2次面分離型（お屋敷型）。実際の街路をこの3分類の混在型を考え、5分類した。

本研究は、この篠原らが行った街路と住宅の空間分節（接道形式）の分類を用いる。

(2) 街路パターン

街路パターンは、街路が近隣住民の生活交流空間となり得る可能性、即ち近隣住民が出会う度合い、またよそ者の進入（通過交通）により交流が脅かされる度合いを決定する。

よそ者の進入もなく、通過交通も存在しない生活交流空間として機能している街路形態は、線形が閉じているクルドサック型街路（袋小路型）である。そして、街路が生活交流空間として最も機能しないと考えられるのは、線形が閉じていないグリット型街路で、通過交通の多い、大型施設に連続するしたり幹線道路などへの抜け道となっている街路などが考えられる。また、車両制限を加えたコミュニティ道路などはこの中間にあたる。

(3) 街路分類図の作成

(1)の街路と住宅の空間分節（接道形式）、(2)の街路パターンにより街路空間に対して2つの属性が与えられた。それぞれ軸に取り、全ての街路空間の分布は、図-1のようにまとめられる。

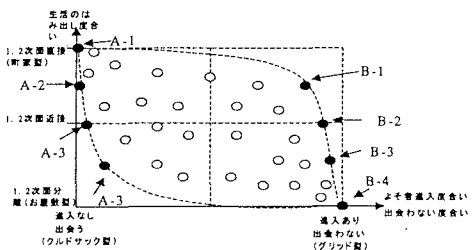


図-1 街路分類図

3. 調査及び分析方法

(1) 調査対象地域及び内容

認識レベルを分析するために仙台市内の住宅地で

集合住宅を含まない戸建て住宅で形成される街路の世帯にアンケート調査を行った。そして街路分類図(図-1)上、極にあたる街路を調査対象街路とする。つまり A-1~4、B-1~4 の街路(表-1)を扱った。有効回答率は、35.8%、対象街路は、58 本、世帯数にして 247 軒。ここで 1 街路単位は、クルドサックは、閉じている街路部分を、グリットは街路を挟む 1 ブロックとした。1 街路当たりの平均軒数は 10.61 軒となった。住民相互認識は顔の認識度合いと名前の認識度合いの 2 つの要素で評価した。認識段階を I~V の 5 段階に設定し(表-2)、調査対象街路を含む住宅地図上(1/500)に認識段階を記入してもらった。

表-1 調査対象街路

分類番号	街路パターン	空間分節
A-1	クルドサック型街路 (A)	直接外壁(町家型)
A-2		直接外壁(町家型)-1.2次面近接型
A-3		1.2次面近接型
A-4		1.2次面近接型-1.2次面分離型(お屋敷型)混在
B-1	グリット型街路 (B)	直接外壁(町家型)-1.2次面近接型
B-2		1.2次面近接型
B-3		1.2次面近接型-1.2次面分離型(お屋敷型)混在
B-4		1.2次面分離型(お屋敷型)

(2) 分析方法

名前、顔の認識それぞれによる認識指標を次の表-2 ように設定した。名前認識指標は、名前を知っているが 1、知らないが 0、とダミー変数として認識段階を評価した。また、顔認識指標は仙台市の戸建て住宅の戸当たり人口が 3.30 人(平成 7 年国勢調査)であることより、ある世帯の全員の顔を知っているということは 3.30 人の顔を知っていると考えて、顔を知っている人数で認識段階を定量化した値を用いた。しかしここでは、「顔を知っている人がいる」という認識段階については、その世帯の半分の人の顔を知っていると考えて定量化した。

表-2 住民相互認識レベルの指標設定

認識段階	名前認識指標	顔認識指標
V 苗字がわかり、全員の顔を知っている	1	3.3
IV 苗字がわかり、顔を知っている人がいる	1	1.65
III 苗字はわからないが、顔を知っている人がいる	0	1.65
II 苗字はわかるが、顔を知らない	1	0
I 全く知らない	0	0

(3) 分析結果及び考察

1) 街路形態ごとの認識レベルの比較

表-1 の各街路ごとに、1 街路単位全体の認識レベル評価のため、名前、顔認識指標の軒数平均を表-3 に示した。

表-3 名前、顔認識指標の軒数平均(街路分類)

	名前認識指標		顔認識指標	
	クルドサック	グリット	クルドサック	グリット
直接	0.92		2.86	
直接+近接	0.93	0.96	2.54	2.61
近接	0.97	0.88	2.57	2.27
近接+お屋敷	0.96	0.83	2.83	2.06
お屋敷		0.73		1.89

クルドサック型街路では、空間分節によってあまり認識レベルに違いが現れていない。しかし、グリット型街路においては、空間分節がきつくなるほど(直接→近接→お屋敷と向かうほど)認識レベルが低下していることがわかる。したがって閉じているという街路特性、つまり人が出会う、よそ者(通過交通)が存在しないことが大きく認識レベルに影響を与えることがいえる。そして通過交通の存在するグリット型街路では、生活のはみ出し度合いが認識レベルに大きく依存してくるといえる。

2) 街路空間と認識レベル

全ての街路空間での認識レベルの在り方を見るために、認識レベルの評価を空間分節と街路パターンの変化の連続性を考慮して図-1 上で評価をすれば、図-2 のようになることが予想できる(ここでは認識レベルを顔認識指標の値で評価している)

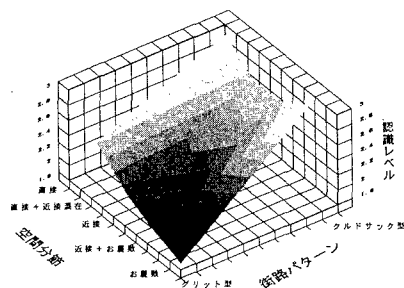


図-2 街路空間と認識レベルの関係

4. おわりに

以上の結果より、住民が出会うまたよそ者の進入する度合いを規定する街路パターンと生活のはみ出し度合いを規定する空間分節の 2 つの街路空間構成要素の在り方で住民の認識レベルが変化してくることがわかった。

住民の相互認識という観点から住宅開発を考えた際、空間分節、街路パターンによってそれをコントロールできる可能性を示せた。

＜参考文献＞

- 1) 太田勝敏「道路が近隣のコミュニティ形成に及ぼす影響」(1983) 第 18 回日本都市計画学会学術研究発表論文集
- 2) 篠原修、佐々木葉「戸建て住宅地における街路の「格」に関する調査・研究」(財)第一住宅建設協会、地域社会研究所
- 3) 大野秀敏「見えがくれする都市-IV. まちの表層」(1980) 鹿島出版社
- 4) 中村八郎「都市のコミュニティの社会学」(1973) 有斐閣双書 3